

# あとがき

学生時代から統計書は何冊か読もうと努力したが、どれも途中で挫折した。計算の方法はある程度わかるとしても、その意味するところがどうしてもピンとこなかった。その状態はつい何年か前まで続いていた。「もっとわかりやすい統計書」があればいいのに、と何度思ったことか！

それでも、統計検定は日常的に使用し学会発表を行い、研究論文をずるずると書いてきた。統計検定の間違いを指摘されたこともある。こんなことでいいはずがない。おそらく大多数の研究者も同じ思いではないか。



あるとき、大学で統計学の講義を行うことになり本気で勉強をはじめたが、講義しつつも本質的な部分はまだはっきりとは掴めていなかった。第1巻「はじめに」で述べたように、本書執筆の発端はある学会の全国大会で行った教育講演である。わずか50分で本シリーズ2冊分の内容ほぼ全体を講演した。短時間での講演のために内容を究極に単純化したが、その準備過程でようやくみえていなかったものがみえるようになってきた。

講演前は、あまりにも簡単に説明しているので、本当にこんな講演で満足していただけるのであろうか？と考えていたが、思いもかけず大きな反響があったことで、その不安は一掃された。多くの研究者が知りたいのは細かい計算方法ではなく、本質的な部分であることがよくわかった。



本書はこのようにさっぱりわからないところから積み上げてきた体験をもとに、生命科学系の研究者にとって一般の統計書より「もっとわかりやすい統計書」にすることを目的として書いたつもりである。みなさんの研究に少しでも役立てていただければ幸いである。

学会や論文の統計検定の間違いが少しでも減ることを祈って筆を置きたい。